



Title	林芙美子研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	姜, 鉦鎬
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14147号
Issue Date	2020-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79319
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kang_Jeonho_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 姜 銓 鎬

学位論文題名 林芙美子研究

・本論文の観点と方法

本論文は、林芙美子（一九〇三年～一九五一年）の初期作品から後期の作品に至るまで、通時的に芙美子文学の全体像を捉えようとする作家・作品研究である。停滞している芙美子研究に新たな視座を提供することを目的にしている。芙美子は、一九三〇年頃から一九五一年まで、約二〇年にわたる創作期間中、膨大な作品を発表し、かつ多様な社会活動を展開した。特に、伝記的な事実に基づいて、昭和初期の貧困生活を生々しく描いた「放浪記」により当時の大衆に幅広く支持された作家として知られている。そのため、初期の代表作「放浪記」は、従来よく論じられてきた。また、中期の戦時下に書かれた従軍記は、戦後に批判されることになるものの、晩年の長編小説「浮雲」は、芙美子文学の最高傑作として高く評価されている。本論文は、そうした代表作や従軍記の分析も含みつつ、これまでほとんど先行研究では注目されてこなかった「放浪記」以前の童話や中期の従軍記以外の小説、後期の短編小説群など、十五編の短・長編作品を取り上げて総合的に論じている。これまでの少数の代表作を対象にした作家論的な研究方法を見直し、時代背景を踏まえたうえで、女性表象と語りの審級の分析を主眼とする精緻な作品論や同時代の他の作家の作品との比較研究など、多様な角度から芙美子文学を論じる。

そうした観点からのアプローチにより、初期から一貫して描き続けた下層社会の人々、とりわけ女性像が、一人称的な語りから三人称的な語りによってどのように変容したのか、そして、そこにどのような芙美子の社会に対する意識が反映されているのか、戦前・戦中・戦後にわたる芙美子文学の基底的部分と変容のプロセスを統合的に明らかにする。

・本論文の内容

本論文は、序章・三部構成全十章・終章から成る。芙美子の約二〇年間にわたる活動時期を初期・中期・後期に分けてそれを各部に割り当て、それぞれの時期に発表された作品群を分析する。

序章において、本論文の目的、日本近代文学史における林芙美子文学の位置、本論文の構成について述べる。

第一部「初期林芙美子文学——自伝的作品の時期」では、一九三〇年の「放浪記」発表以前から、「ペン部隊」の一員として、積極的に戦争協力を展開する前までの時期を芙美子文学における「初期」と規定し、「放浪記」はもちろん、それ以前に発表された作品についても論じる。より多様な初期作品を取り上げることで、「放浪記」論だけでなく、新たな観点で初期の作品群を論じることの重要性を示す。

第一章「「放浪記」以前の習作期作品について」では、芙美子が一九二五年から一九二七年まで雑誌『少年少女 美談』に連載した童話作品三編の分析を通して、後続の「放浪記」との関連性を確認する。初期作品の共通点として、経済的に困窮し不遇な家庭環境にある主人公、作中詩の挿入、悲劇的な結末などの特徴をあげる。

第二章「「放浪記」論Ⅰ——芙美子の初期代表作品」では、改造社と新潮社で発刊された版本の異同とテキスト分析を通じて、「放浪記」の成立過程と検閲による影響などを明らかにする。

第三章「「放浪記」論Ⅱ——「放浪記」における女性イメージ」では、「放浪記」における女性のイメージについて、主人公「私」が経験した職業の中で、特に女給として働いていた時期のことが描かれた部分を中心に考察する。さらに、木谷絹子「女給日記」（一九三〇年）など、同時代における女給イメージとの共通性と差異について述べる。

第四章「『清貧の書』論」においては、初期の芙美子文学を代表する短編「清貧の書」の特徴について、短編「^{まち}小区」の分析と合わせて考察する。

第二部「中期林芙美子文学——戦争協力作品の時期」では、芙美子が従軍作家団体「ペン部隊」に参加して、直接体験したことを記録した従軍ルポルタージュ作品の内容や当時の新聞メディアによる宣伝活動などを確認し、どのような形で戦争に協力したのかを考察する。一方、時流に合わせた作品群だけでなく、時代的な雰囲気とは無縁の作品群も扱い、芙美子文学における中期時代の創作活動を、戦争協力以外の観点から論じる。

第五章「芙美子の戦中期活動Ⅰ——従軍ルポルタージュ作品」では、『戦線』の収録作「漢口戦従軍通信」と『東京朝日新聞』に連載された座談会等を通して、芙美子の戦争協力行為について考察する。

第六章「芙美子の戦中期活動Ⅱ——芙美子の中期非従軍・従軍文学におけるアジア認識」では、芙美子の「戦線」と朝鮮人の作家・^{チェミョンイク}崔明翊の「心紋」を比較検討する。二作を比較して、当時の日韓の作家が、中国に対してどのような認識を抱いていたのかを明らかにする。

第七章「従軍作品以外の中期作品——短編集『初旅』収録作品分析」では、一九三五年作の「帯広まで」、一九四一年作の「黯爾」と「初旅」等を取り上げ、それぞれの作品の主題や、初期作品と後期作品との関連性などを視野に入れつつ論じる。

第三部「後期林芙美子文学——戦後社会を批判する作品の時期」では、一九四五年八月の終戦後、芙美子が発表した短編・長編作品を取り上げる。後期作品は、ほとんどが終戦直後の日本社会が抱えていた社会的な問題を、直接作品の中で描き出している。このような作業を通して、これ以前の時期の作品には見られなかった強い社会批判・戦争批判が確認でき、そこに芙美子後期文学独自の特徴があることを明らかにする。

第八章「後期短編について——「夜の蝙蝠傘」、「骨」、「盲目の詩」、「^{ダウントウン}下町」論」において、「夜の蝙蝠傘」、「骨」、「盲目の詩」、「下町」の各作品に描かれる戦後の社会像、女性像について分析する。後期になると、女性を取り巻く社会の不条理な状況を告発する傾向が強まることを論じる。

第九章「芙美子文学の完成——「浮雲」論」では、「浮雲」について、初期作品「浅春譜」等と比較しながら、作品のプロットと文体の表現方法がどのように変化していたのかを確認し、物語の構造と作中人物たちとの関係性にも着目して論じながら、芙美子文学の到達点を測定する。

第十章「同時代女性作家との比較——終戦直後の社会認識」では、宮本百合子の「播州平野」と佐多稲子の短編数作を取り上げて、芙美子文学との共通性と違いについて論じる。

終章で、各部の論旨をまとめ、芙美子文学の意義を再確認したうえで、本論文を総括する。